

2019年度南山大学大学院 法務研究科 法務専攻

<専門職学位課程> 入学試験 A日程

(2018年7月14日実施)

試験科目：法律科目試験・刑法

配点：100点

以下の問題文を読み、具体的事実を摘示しつつ、X および Y の罪責を検討しなさい。刑訴法および特別法の論点については検討しなくてよい。

1. Yは、2年前に夫と死別した後、実家に戻って、近所の大型スーパーに勤務しながら5歳になるAを育てていた。1年前頃から、Yは、勤務先のスーパーの店長X(独身)と親しく付き合い始めるようになった。Xは人当たりがよく、優しい性格で、Yもそこに強く魅かれていた。付き合い始めて半年後には、結婚することを前提としてマンションを借り、X、Y、Aの3人で暮らすようになっていた。

2. しかし、3人で暮らし始めてからすぐ、Xは、飲酒(焼酎が中心)するたびに、普段とは全く人が変わったようになり、YとAに対して暴力を振るうようになった。そのため、Yは、Xが飲酒を始めるとAを連れて実家や友人宅に避難するなどしていたが、避難行動が間に合わない時には、Yが手足の指を骨折させられたり、Aが打撲傷を負わされることも少なくなかった。こうした状況のもとで、Yは、結婚に踏み切ることができない一方で、平常時のXの優しさから別れを切り出すこともできず、中途半端なまま3人での暮らしを続けていた。

3. 某日の夕刻、Yが、仕事の関係でXよりも遅くに帰宅したところ、Xは、すでにリビングで焼酎を飲み始めていた。Yは、まずいことになるかもしれないと思って、自室にいたAを連れてマンションから出ようとしたところ、Xは、これまで見たこともない不機嫌な顔をして、「今まで何をやってたんだ。俺は飯も食べていないんだぞ」と言って、いきなりYに殴りかかってきた。殴られたYはその場に倒れ、それを見たAがYに駆け寄ったところ、Xは、「余計な真似をするな」と言って、Aを殴打した。

4. 逃げることもできないYとAが、リビングの隅で抱き合っただ大人しくしていたところ、さらに焼酎を飲み続けていたXは、Aに対して、「生意気なガキだ。Yが連れてきた時からお前が気に入らなかった」と言いながら、Yの制止にもかかわらずAを殴打し始めた。それを見たYは、このままではAが死んでしまうかもしれないと考え、「どうか止めて下さい」と再三懇願したが、いつになく激高していたXは殴打を止めることがなかった。いつになく異常な様子を見たYは、力づくでXを止めに入れば自分が何をされるかわからないと怯え、XがAを殴打し続けるのを呆然と見ていることしかできなかった。

5. 1時間ほどして、Xが疲れて寝てしまったのを見て、YがAを助け起こしたところ、Aは呼吸をしていなかった。びっくりしたYが携帯電話で救急車を呼び、Aは近くの病院に緊急搬送されたが、病院で死亡が確認された。Xは、病院からの連絡を受けた警察によって緊急逮捕された。その後、いつになく多量の飲酒をしていた(日頃はアルコール度40°の焼酎を3合程度に対し、行為時はほぼ倍を飲んでいて)Xの行為時の責任能力が問題になったが、Aに殴打を始めた時点では完全責任能力が認められる一方、疲れて寝てしまう直前の時点では心神耗弱の状態にあったことが判明した。

2019年度南山大学大学院 法務研究科 法務専攻

＜専門職学位課程＞ 入学試験 A日程

(2018年7月14日実施)

試験科目：法律科目試験（憲法）

配点：100点

以下の文章(フィクション)を読み、設問に答えなさい。

2010年、産業廃棄物処理業者のA社がB県C町D地区に産業廃棄物の最終処分場の建設を計画した。C町は2015年2月、A社から協力金35億円を受け取る協定を交わした。しかし、この協定の撤廃および産業廃棄物処分場建設反対を掲げるEが町長選挙に立候補し、同年4月に初当選した。新町長Eは、この産業廃棄物処分場建設の賛否を問う住民投票の実施を公約に掲げており、C町議会は、2016年6月にC町住民投票条例を制定し（【資料】参照）、同条例に基づき、その後、住民投票を実施した。

ところで、C町住民投票条例第6条において投票の資格を有する者は、日本国民たる住民に限定されることになる。Xは、「日本国との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者等の出入国管理に関する特例法」上の「特別永住者」であり、30年以上C町に住所を有する住民である。しかしXは、日本国籍を持たないために上記住民投票の際に投票できなかった。Xは、他のいくつかの地方自治体が制定した住民投票条例では、「特別永住者」でも投票資格が与えられており、そうしたケースが増えていることを知った。Xは、C町住民投票条例が投票資格を日本国籍保持者に限定していることは憲法違反なのではないかと考えるようになった。

設問 Xは、弁護士であるあなたに対して、「C町住民投票条例」がX自身の投票資格を認めないことについて憲法違反ではないかと相談にきた。あなたがXの弁護を引き受ける場合、どのような憲法論を展開するか、述べなさい。

【資料】C町住民投票条例（C町における産業廃棄物処理施設の設置についての住民投票に関する条例）

（目的）

第1条 この条例は、C町D地区に計画されている産業廃棄物処理施設（以下「産廃施設」という。）の設置について、町民の賛否の意思を明らかにし、もって町行政の民主的かつ健全な運営を図ることを目的とする。

（住民投票）

第2条 前条の目的を達成するため、産廃施設の設置に対する賛否について、町民による投票（以下「住民投票」という。）を行う。

2 住民投票は、町民の自由な意思が反映されるものでなければならない。

（投票資格者）

第6条 住民投票における投票の資格を有するもの（以下「投票資格者」という。）は、投票日において、C町に住所を有する者であって、前条に規定する告示の日（以下「告示日」という。）においてC町の選挙人名簿に登録されている者及び告示日の前日において、選挙人名簿に登録される資格を有する者とする。

（注）選挙人名簿に登録される者は、公職選挙法によれば、当該市町村の区域内に住所を有する日本国民である。

2019年度南山大学大学院 法務研究科 法務専攻

<専門職学位課程> 入学試験 A日程

(2018年7月14日実施)

試験科目：法律科目試験（商法）

配点：100点

次の文章【事実1】および【事実2】を読んで、【設問1】および【設問2】に答えなさい。

【事実1】

AとBは、ヘアサロンの運営を目的とする甲株式会社（以下、甲社とする。）の発起人である。

AとBは、それぞれ設立時発行株式の半数を引受け、払込期日に、 α 銀行の払込専用口座に3,000万円を払込んだ。なお、Aは β 銀行からの借入金で払込を行った。

甲社の設立登記後、代表取締役となったAが α 銀行の払込金専用口座から甲社の運転資金だと偽って3,000万円を引き出した後、Aの β 銀行からの借入金返済にあてた。

【設問1】Aに対して発行された株式の効力について、会社法の関係する規定を挙げて論じなさい。

【事実2】

甲社設立の2カ月前にAとBは、甲社の設立事務所として利用するために、名古屋市内のマンション1室に関し、その所有者Cとの間で賃貸借契約を締結した。AとBは、このマンション1室を、会社成立後に甲社の店舗兼事務所として利用する予定であった。ただし、定款にこのマンション1室の賃貸借契約に関する記載はない。

【設問2】Cに対してすでに支払った2カ月分のマンションの家賃を、AとBが設立後の甲社に対して請求できるか。

2019年度南山大学大学院 法務研究科 法務専攻

＜専門職学位課程＞ 入学試験 A日程

(2018年7月14日実施)

試験科目：法律科目試験（民法）

配点：200点

次のⅠおよびⅡに解答しなさい。なお、設問には現行法に基づいて解答しなさい。

Ⅰ 以下の文章を読んで、設問に答えなさい。

Xは祖父から5年前に本件土地の贈与を受けたものの、土地についての所有権移転登記は未了である。他方、Aは、昨年、本件土地に隣接する土地を購入したが土地の境界を過失なく誤解して、本件土地上に越境して無権原で本件建物を建築・所有している。この場合、以下の設例について、Xは本件土地の侵害に対して、その回復を求めることができるか、誰を相手方とすべきかを含め説明せよ。（(1)(2)はそれぞれ独立の設例である）。

(1) Aは、建築した本件建物について、親戚のB名義で建物所有権保存登記をしたが、この登記にはBはまったく関与しておらず、Aの独断でなされたもので、Bは建物の所有権を取得したことがないケース。

(2) Aは、建築した本件建物について自己名義で建物所有権保存登記をした後、この建物をCに譲渡したが建物所有権移転登記はA名義のままであったケース。

Ⅱ 以下の文章を読んで、以下の設問(1)および(2)に答えなさい（なお、各設問はそれぞれ独立している）。

Xは自転車に乗って、走行中のYの運転する自動車に接触し、Xが自転車ごと転倒した（以下、「本件事故」という）。Xは転倒により右肘を骨折し、右膝にも打撲傷を負った。事故直後の医師の診断によれば、骨折は全治1か月、打撲傷は全治5日間とのことであった。以下の各設問の場合において、Xの損害賠償請求に対して、Yはどのような主張をすることができるか、について論じなさい。

設問(1) Xは4歳の子供である。本件事故は、アルバイトのベビーシッターであるAに連れられて近所で遊んでいたところ、Aがかかってきた携帯電話に対応する際に、Xが子供用自転車に乗って歩道からいきなり車道に出て発生したものであった。

設問(2) Xは会社の経営者である。本件事故の一週間後、Xは突然右膝に激しい痛みを感じ、医師に骨髄炎と診断された。これは、以前に罹患した骨髄炎が本件事故の打撲傷が引き金となって再発したものであり、この骨髄炎の治療のため、Xは4ヶ月間の通院が必要となった。